

「家庭の天使」から「白衣の天使」へ Little Dorrit にみる nursing の実践をめぐって

西垣 佐理

“Every woman makes a good nurse.”
—Florence Nightingale, Notes on Nursing¹⁾

「看護婦」(nurse) は古代から女性の仕事であった。今日専門教育を受けた看護婦は社会に不可欠な存在である。すでに女性の仕事だけではなく男性も「看護師」として働いている。現在のような状態はヴィクトリア朝のイギリスで作られた。当時のイギリスで看護の重要性が認められたのは、クリミア戦争でナイティンゲールが活躍した事情も挙げられるが、それよりも当時の女性たちの理想像として社会が看護を奨励したことにあるだろう。「看護」(nursing)には、パトモア(Conventry Patmore, 1823-96)の詩集『家庭の天使』(The Angel in the House, 1854)にみられる女性の「良妻賢母」的な性質がふさわしい。とりわけ、ナースの持つ「癒しの力」は、ラスキン(John Ruskin, 1819-1900)が「女王の庭園について」(“Of Queen’s Gardens,” 1864)において強調していることである²⁾。また、エリス(Sarah Stickney Ellis, 18??-72)は『イギリスの女性たち』(The Women of England, 1839)のなかで「女性の感化力」を重要視しているが³⁾、これも nursing の本質と密接に結びついている。このように、ヴィクトリア朝社会における nursing は女性にとって非常に重要な役割だったのである。文学においても、チャールズ・ディケンズ(Charles Dickens, 1812-70)の描く女性たちには同様の役割が与えられている。彼の11番目の小説『リトル・ドリット』(Little Dorrit, 1855-57)において、主人公のエイミーが家族に対して行う役割はまさにナースとしてのものである。ディケンズは社会における男女の役割分担を小説中に明確に示した作家の一人である。しかし、彼が女性を単に理想化していたというのではない。彼女たちの献身の中に、陰なる支配と自立の萌芽を垣間見ることができるのである。そこで本論では『リトル・ドリット』の主人公エイミーを通して、ヴィクトリア女性の看護のもつ意義を考察するべく、社会背景を眺めた後にエイミーが看護にかけた期待とその実践にみられる意義に注目し、結論を導きたい。

『リトル・ドリット』において、エイミー・ドリット(Amy Dorrit) は父ウィリアム(William)やアーサー・クレナム(Arthur Clennam)など身近な人々を看病し、周囲から「ナースとしてのエイミーは完璧だ」と言われている⁴⁾。彼女の本職はお針子であり、職業として看護婦をしているのではないが、家庭のナースとしての役目を果たしている。エイミーはディケンズの理想的女性の一人として描かれている。それに関して、マイケル・スレイターは『ディケンズと女性』(Dickens and Women, 1983)の中で「ディケンズのヒロインたちには生まれつきナースの要素が備わっている」と述べている⁵⁾。ナースとしてのエイミーは常に賛美の対象であり、「孝行娘」の手本である。なぜこれほどまでにエイミーが称賛的になりえたのか。それを見ていく前に、ヴィクトリア朝イギリスにおいてナースとはどのように位置づけられていたのかを見ることにしよう。

OEDによると、ナースには元々「養う」(nourice) という意味があり、それから派生して「乳児に乳を飲ませる、さもないとすれば世話をするために雇われた女性、又は子供の世話をするもの」、つまり「乳母」(wet nurse) や「子守」(dry nurse) を意味し、「他人の世話や忠告をする人」、「病人の看護をする人(主に女性)」などを指す⁶⁾。特に、ヴィクトリア朝の女性が行うnursingには、プロフェッショナルな職業と、家庭婦人の勤めの両方が重視された。職業としては、家庭の召使としての「子守・乳母」と、病院に勤務する「看護婦」があった。中流家庭において十代の少女達が「子守」として雇われていた。1861年の統計によれば、召使として働いていた人口の約10分の1が子守だったとされている。1892年にはNorland Nursing Schoolが設立されたことによって数は飛躍的に増大し、1901年までにはイングランドとウェールズで約20万人もの女性が子守としての資格を得ていたのである⁷⁾。「看護婦」は子守よりも早くから職業化されていた。しかし、初期の看護婦の実態は非常に劣悪な状況だった。従事していたのは大抵労働者階級の女性たちで、彼女達はたいした訓練も施されずに慈善病院に勤務し、賃金も微々たるもので、ともすれば酒を飲みながらの勤務もあつたらしいが、医学の発達とクリミア戦争におけるナイティンゲールの活躍により、看護婦の地位は徐々に向上していった。看護婦の労働人口は、1851年の段階ではまだ正式な職業としては認知されてはいなかったが、その後急速に増え、1881年までには35,175人の女性がナースとして登録されている⁸⁾。

家庭においては、主婦がナースであった。とりわけ、中流階級以上の女性達は、家庭で

病人の看護をするのみならず、慈善活動としても nursing を行っていた。但し、彼女たちの主な義務は家庭を管理することであって、家事には召使いを育児には乳母や子守を雇い、自分達は専ら慈善としての nursing にいそしんでいたのである。更に彼女たちは家庭の外で働く男性たちを家に迎え、彼らの傷ついた心を癒す「天使」として振舞うことも求められた。このように、彼女たちは家庭を「職場」として様々な役割を果たし、社会の理想であった「家庭の天使」像を体現するのが勤めであった。つまり、役割としてのナースは一般的に女性の責務であり、子供や病人に対してそれを行うのは彼女たちの「天職」であるという認識があったのだ。

II

看護は女性たちに課せられた必要不可欠な「仕事」であると述べてきた。それでは『リトル・ドリット』において、主人公エイミーが果たす nursing とは一体どのような性質を備えたものであるかを見ていくことにしよう。

エイミーはマーシャルシー監獄 (Marshalsea Prison) で生まれ育った娘。22歳という、年齢的には大人の女性であるが「年齢の半分に満たない」(93) 子供の容姿のため、皆に「リトル・ドリット」と呼ばれている。彼女は、20年以上もマーシャルシー監獄に囚われている父親ウィリアムを世話している。「落ちぶれた家族のリーダー」(112)として一家を取り仕切り、お針子として家計を支えている。そんな彼女の存在に気付くのが中国から帰国した商人アーサーである。彼は、自分の家族が金銭面で誰かにひどい仕打ちをしたのではないかという疑惑にさいなまれていた。そんな折、家にお針子としてきていたエイミーの境遇を知る。彼は家族の罪を償うために彼女の父を監獄から解放させようと奔走し、成功する。ドリット家は莫大な財産を得て自由の身になりイタリアへ外遊するが、エイミーは一人とり残されたように感じる。やがて父ウィリアムは財産をより殖やすべく、実業家マードル (Merdle) の会社に投機してしまう。彼は金銭欲にとりつかれ、やがて狂気に陥り、マーシャルシーの影に囚われたまま死んでいく。その後マードルの事業が詐欺であることが分かり、財産はすべて失われてしまう。アーサーもまた同じ会社に投資していたので、破産してマーシャルシーに入れられ、ショックのあまり熱病にかかってしまう。しかしそこにエイミーが再び現れ、かつて父親にしたのと同様に彼を看護する。アーサーは彼女を一人の女性として愛するようになる。やがてエイミーは病いから回復したアーサーに

自らプロポーズして彼と結ばれる。

『リトル・ドリット』において、「病い」は中心的比喩のレベルへと拡大される。その中でもディケンズが最も強調したのは社会のシステム、特に「監獄」がもたらす「病い」の存在である。この作品は、冒頭からマルセイユの監獄が登場し、全体が監獄のイメージで覆われている。主要舞台であるマーシャルシー監獄は、通常の監獄とは異なり、借金をして返済不能になった者が投獄される債務者監獄である。しかも、ディケンズ自身の父親ジョンがかつて投獄された場所で、当時多感な少年だった作家の心に深い傷を残したところでもある。マーシャルシー監獄はこの作品が書かれた 1855 年当時には既に廃止されていたが、彼はあえてその監獄を小説の中心舞台として据え、そこに囚われた人々を描こうとしたのである。監獄は、社会のシステムが作り出した「囚われの病い」を象徴しているのである。

このような病いを作り出す原因は二つある。一つは、この作品の元の題名であった Nobody's Fault、すなわち「ノーボディの罪」に集約できる。「ノーボディの罪」とは誰も責任を取らないことによって生じる数々の社会問題を象徴したものである。彼は自分が編集していた雑誌『家庭の言葉』(Household Words: A Weekly Journal, 1850-59) にこの「ノーボディの罪」に関する記事を掲載し、この問題に関して強い関心と批判の目を向けた。その記事の冒頭において、彼は「ノーボディの力はイギリスにおいて非常に巨大であり、それだけが職権と怠慢の両方の点において非常に多くの行為に責任を持っている」と述べている⁹⁾。彼がいう「ノーボディの力」とは、特定の人物ではなく複数の力が寄り集まって大きな勢力を持ち、しかも責任の所在の不明な権力を指す。ディケンズはこの最たるものとして、当時の役所を取り上げ、その体質を皮肉って作品中に「繁文縟礼局」(Circumlocution Office)と命名している。以下はそれを端的にあらわした部分である。

The Circumlocution Office was (as everybody knows without being told) the most important Department under Government. No public business of any kind could possibly be done at any time without the acquiescence of the Circumlocution Office. . . . It was equally impossible to do the plainest right and to undo the plainest wrong without the express authority of the Circumlocution Office. . . . Whatever was required to be done, the Circumlocution Office was beforehand with all the public departments in the art of perceiving—HOW NOT

この役所の特徴は「いかに成さずに済ませるか」(“How Not to Do It”)というモットーで表される。すなわちすべての国務は大量の書類でもってあちこちの部署に回されるが、結局処理されないままで放置され、誰もそれに対して責任を取らない。ディケンズはこの役所を、名もない人々の生活に被害をもたらす元凶として描き、当時の政府の無為無策ぶりについて痛烈に批判したのである。

もう一つの原因は経済的束縛、すなわち「金」による囚われで、この状況の最も強くあらわれた場所がマーシャルシー監獄である。『リトル・ドリット』において、マーシャルシーは投獄されることによって借金の返済を逃れた人々の精神が無気力になり、墮落するという病いを引き起こす場所として描かれている。つまり「金」がここに囚われた人々にとって束縛であり、病いの原因を作り出しているのである。マーシャルシーの囚人バンガム医師 (Dr. Bangham) は言う。

We are quiet here; we don't get badgered here; there's no knocker here, sir, to be hammered at by creditors and bring a man's heart into his mouth. Nobody comes here to ask if a man's at home, and to say he'll stand on the door mat till he is. Nobody writes threatening letters about money to this place. It's freedom, sir, it's freedom! (103)

監禁は囚人の精神に「不自然な心の平安」(786)をもたらし、更には、一旦監獄生活に慣れてしまうとそこから抜け出すことに一切関心をもたなくなる。それは心の病いであり、快復は非常に困難である。そしてこの病に冒された「患者」の代表が、エイミーの父ウィリアムである。彼は本来なら経済的に一家を支える役目であるにもかかわらず、監獄に囚われているのでそれができない。結果的に彼は金に対する強い執着を持つようになるのだ。また、アーサーは、「金で物事を測る両親に育てられた」(59) おかげで金に対して幾分懐疑的ではあるが、金に囚われた状態から抜け出せないでいる。他にも上流社交界、銀行家のマードル、バーナクル一族 (The Bernacles)、ブリーディング・ハート・ヤードの住人達 (Bleeding Heart Yarders) など、この世界の人々は「貧困・金銭欲・名誉欲」など、皆それぞれの「監獄」に住み、囚われの病いに冒されているのだ。とりわけ『リトル・ド

リット』においては男性の閉塞観が強調して描かれているのである。

III

さて、このように病んだ社会に対してエイミーはどのような役割を果たすのか。それを検討する前に、当時の女性の考え方を見る必要があるだろう。その代表としてフローレンス・ナイティンゲール (Florence Nightingale, 1820-1910) の思想が挙げられる。というのも、彼女の著書の中には若い女性の本音が述べられていると思われるからである。著書の一つ『カッサンドラ』(Cassandra, 1855) において、彼女は「誰か新しい友が病気でいるときの看護婦となっている自分を夢見ているものがないでしょうか。又ある人は、評判を引き出し、家庭の世界の単調な出来事よりも共感の糧をもたらしてくれるような男性とのロマンティックな冒険に心惹かれている人がいないでしょうか？」¹⁰⁾と述べている。このように、病気の友人を看病する夢、そのような友との夢の冒険の夢、更に家庭の外の世界に対する憧れが等しいレベルで描かれているところに、女性の看護に対する考え方の一端が窺える。つまり、女性がナースとしての役目を果たすのは、当時の女性の領域である「家庭」において病人を献身的に看病し、信頼と愛を得るだけではなく、社会において自立し、自己認識をしたいがためではなかろうか。このように、女性が人を看護するという「夢」には、看護による献身と女性の「感化力」がもたらす支配、さらには社会への憧れというアンヴィヴァレントな願望が存在している。そんな看護のもつ性質が、いかに女性たちを惹きつけたかを想像するのは容易であろう。ヴィクトリア朝イギリスは厳然とした家父長社会であった。その家父長たち、すなわち一家を支える男性が、女性の看護を受けているときはおとなしく彼女の指示に従うのである。更に、ナースとしての女性は患者の病いを癒す力を持っているのだ。言い換えれば、女性は看護によって患者を感化し、その結果支配するに至るといふ密かな「夢」を持っていると言えるであろう。そんな女性の心情は、ヒロインであるエイミーにも強く表れている。彼女が求めていたのは、家庭において影響力を発揮できる存在になることであった。彼女はナースとしての役目を果たして一家の大黒柱となり、家族の愛情を一身に受け、頼りにされるのに生きがいを見出し、尚且つ治療を試みていたのだから。これらの観点から、エイミーも「看護」という手段を用いて家族を支え、自己の存在を認めてもらうと同時に彼らの病いも癒したいという「夢」を見ていたといえるのではないだろうか。

それでは、エイミーが看護を通していかに自己実現と社会的病いの治療の為の実践を試みたのかを、彼女の「患者」である父ウィリアムとアーサー・クレナムを中心に具体的に考察していきたい。

父ウィリアムの看護における自己実現の点について考えるならば、エイミーはマーシャルシーでは成功したといえるだろう。なぜなら彼女は家計を支えているし、自分が家族にとって不可欠な存在であるということを自覚しているからである。更に、父親との関わりにおける彼女の役目は、第1部第19章の“classical daughter”のモチーフに最も端的に示されている。

There was a classical daughter once - perhaps - who ministered to her father in his prison as her mother had ministered to her. Little Dorrit, though of the unheroic modern stock, and mere English, did much more, in comforting her father's wasted heart upon her innocent breast, and turning to it a fountain of love and fidelity that never ran dry or waned, through all his years of famine. (273-74)

ディケンズは、牢獄に囚われて飢餓状態にある父親に、みずからの乳を含ませて飢えから救った親孝行な娘ユーフレイシア (Euphrasia) の物語をドリット親子に当てはめている¹¹⁾。エイミーとウィリアムの親子関係は逆転し、エイミーがまさに子供化してしまった父親を慰めるナースとして存在しているのが示唆される。また、父は彼女なくして生きることができないことも暗示されているのである。このように、彼女の nursing は父の「看護婦」のみならず、本来の意味である「乳母・子守」という役割も果たし、その結果逆転された親子関係ができあがるのだ。この場面において、エイミーはナースとしての役割を十分に果たしているといえるだろう。

しかしイタリアにおいて、エイミーは家族が裕福になったために活躍の場を失い、違和感を覚える。

To have no work to do was strange, but not half so strange as having glided into a corner where she had no one to think for, nothing to plan and contrive, no cares of others to load herself with. Strange as that was, it was far stranger yet to find a space between herself and her father, where others occupied

themselves in taking care of him, and where she was never expected to be. (516)

このような状況におかれたとき、エイミーは自分の居場所がなくなったように感じ、生きがいを見出せないでいる。しかし、彼女の父親が最終的に狂気に陥ってマーシャルシーにいた時の精神状態に戻ったとき、彼女は父のナースとしての地位を再び回復する。しかし、父は元に戻ることなく死んでいく。その意味で、イタリアでは彼女の自己実現は失敗に終わったといえる。また、社会的病いの治療に関して言えば、エイミーはマーシャルシーに囚われる以前の父を見たいという夢を持っている。この夢を実現するために父親の抱える病いを治療しようとしたのだ。それは財産を得ることで治療可能かと思われたが、しかしこれも失敗に終わる。イタリアにおいてさえ、彼は金に囚われた精神状態から実は開放されてはいなかったからである。父の抱える「病い」は重く、エイミーがどんなに癒そうと試みても無駄な努力になってしまうのである。結局、エイミーが看護による自己実現と社会的病いの治療は、父親に対しては共に失敗に終わっているといえるだろう。

それではアーサー・クレナムはどうであろうか。アーサーもまた病いを抱えている。彼にとっての病いは、母親に対して意思を持たないことと、自分のアイデンティティが確立できないことである。エイミーの看護に対する密かな願望は、アーサーとの関係にも現れている。彼女はアーサーに対して密かな恋心を抱いているが、それを彼に告げることができずに思い悩む。二人には18歳の年齢差があり、その結果エイミーは彼に子供扱いされて一人の女性として認められていないからなのである。そんな彼に対する治療の試みは、実際にマーシャルシーでかかった熱病が治癒されたことによって成功したとも言える。だが、それよりも重要なのは、エイミーが昔と変わらず「金に汚されていない」(825) 無垢な存在であることを発見したとき、アーサーは金銭に対する心理的束縛から逃れることができたことである。それはとりもなおさず彼が社会的病いから解放されたことを意味する。その結果、アーサーは自分にはエイミーの存在が不可欠であることを認識するに至る。

Dear Little Dorrit.

Looking back upon his own poor story, she was its vanishing point. Every thing in its perspective led to her innocent figure. He had traveled thousands of miles towards it; previous unquiet hopes and doubts had worked themselves out before it; it was the centre of the interest of his life;

it was the termination of everything that was good and pleasant in it; beyond, there was nothing but mere waste and darkened sky. (801-2)

このように思い始めたとき、エイミーが彼に対して始めて自己を主張出来るようになったといえるであろう。彼女は自らの力で看護の実践を成功に導き、一人の女性としての幸福を手に入れたのだ。そしてクレナムとの結婚によって、エイミーもまたマーシャルシーから開放され、自己を主張できる安定した家庭を新たに築くという「夢」を叶えたのである。

父ウィリアムやアーサーといった男性たちとの関係の中で、エイミーが看護を通して得たものは結局何だったのだろうか。厳然とした家父長社会の中でその家父長たる父やアーサーがエイミーを唯一のよりどころとし、頼ったという点に注目すべきである。彼らは自らが保護者であるという認識を捨て、エイミーの看護に身を委ねたのである。そこでは彼女が単に無垢で純粋な「癒しのナース」として存在しているのではなく、いわば支配者となって家庭を取り仕切っている構図がはっきりしているのである。

IV

ナースとしてのエイミーは、ヴィクトリア朝の理想的な家庭婦人像を示したものである。一方、ナイティンゲールは家庭のナースを社会で働く専門職としてのナースに変えたのである。彼女は上流階級出身でありながら看護に従事し、それまで蔑視されていた看護婦の地位を向上させた。当時のイギリスはクリミア戦争の最中であり、戦場における政府の看護対策の不十分さが世間に知れ渡った時期でもあった。そのようなとき、ナイティンゲールが38人の看護婦を連れてスクタリ野戦病院に赴き活躍したのである。彼女は、時の政府が「繁文縟礼局」さながら無責任にも野放しにしていた看護制度に気付き、改革による「癒し」を試みたのである。彼女は戦争後も、1860年にロンドンに看護学校を設立するなど、幾多の看護制度改革に取り組んだ。その結果社会が公衆衛生や看護術に対して多くの関心を寄せるようになったのである。彼女が看護学校の中で実践したのは自立した女性を育成することだった。そして生徒を教育することで若い女性に自立の道を与えたのみならず、自己認識の契機を作ったのである。このようにして19世紀末頃までにナースはガヴァネス(governess)と並んで女性のレスペクタブルな職業として認められるほどになった。女性の社会進出の萌芽である。

女性の看護が作り出した成果とは、次のようにまとめることができるだろう。すなわちナイティンゲールに見た女性の自立の手段としての看護という側面である。そこには病いの治療を通してなされる女性の自己実現の夢が含まれている。それはエイミーの例に見た通り、とりわけ男性に対して有効であった。家父長社会であるヴィクトリア朝イギリスにおいて、女性たちは「家庭の天使」というレッテルを貼られながら、その実、彼女たちは与えられた役割の中で自己主張できる場を見つける努力を続けていたのである。その一つの手段として「看護」の役割があった。そして女性たちは、看護を通して陰から異性を支配する存在であったといえるのである。『リトル・ドリット』は、クリミア戦争でナイティンゲールが活躍した翌年に書かれた。そのような事情を考えると、エイミーが果たす「家庭のナース」という役割は、「家庭の天使」の時代の象徴であったと同時に、女性の社会進出への期待を担っていたということができるのではないだろうか。

註

- 1) Florence Nightingale, *Notes on Nursing: What It Is, and What It Is Not*, ed. Carol P. David. (1859; Rpt., Tokyo: Nihon-Kangokyokai-Syuppankai, 1997) 6.
- 2) John Ruskin, "Of Queen's Gardens," *Sesame and Lilies*. (London: Dent, 1944) 72.
- 3) Sarah Stickney Ellis, *The Women of England*. *The Norton Anthology of English Literature*, ed. M. H. Abrams, 5th ed., vol. 2 (New York: Norton, 1986) 1639.
- 4) Charles Dickens, *Little Dorrit*. (London: Penguin, 1985) 762. 以下本文中にページ数を記す。
- 5) Michael Slater, *Dickens and Women*. (London: Dent, 1983) 306.
- 6) "Nurse," *The Oxford English Dictionary on Compact Disc*. 2nd ed. Computer software. (Oxford: Oxford UP, 1992)
- 7) Sally Mitchell, et. al. eds. *Victorian Britain: An Encyclopedia*. (New York & London: Garland Publishing, 1988) 552-553.
- 8) Jane Rendall, *Women in an Industrializing Society: England 1750-1880*. (Oxford: Basil Blackwell, 1990) 75-76.
- 9) Charles Dickens, "Nobody, Somebody, and Everybody," *Household Words*, 20 Aug. 1856. (Rpt., Tokyo: Hon-no-Tomosya, 1989) Vol. 10, 145.

- 10) Florence Nightingale, *Cassandra and Other Selections from Suggestions for Thought*, ed. Mary Poovey. (New York: New York UP, 1993) 206.
- 11) “A classical daughter. Euphrasia, daughter of King Evander of Syracuse, whom she fed when he was in prison with the milk of her breasts.” *Little Dorrit* 905.

『関西学院大学英米文学』 第43巻第1号 (1999年2月25日発行) pp. 59-71.